

# 静岡大学技術部における 科学研究費補助金(奨励研究)への申請件数向上に向けた取組

永田 照三  
静岡大学 技術部 教育研究支援系

## 1. はじめに

静岡大学技術部は、現在約 60 名の正規雇用職員と 6 名の再雇用職員等で構成されている。一方、科学研究費助成事業(科研費)は、(独)日本学術振興会が行っている学術研究を幅広く支援する取組で我が国最大規模の競争的研究費である。その科研費の中でも「奨励研究」は、e-Rad に研究者情報が登録されていない教育・研究機関等に所属する学術の振興に寄与する研究を行っている者という条件のため、多くの大学の技術職員が該当して応募することができる科研費となっている。しかし、静岡大学技術部では、ここ数年において申請件数の減少や採択件数が低迷しているのが現状である。

## 2. 目的

上記の背景の裏付けとして静岡大学技術部からの科研費(奨励研究)への申請件数は、一昨年 13 件、昨年 14 件と正規雇用職員の科研費(奨励研究)申請対象者約 56 名に対して 2 割ほどの申請件数にとどまっている。このため新規の採択件数も一昨年 1 件、昨年 0 件と低迷しているのが現状である。そこで、まず申請件数を増やす事が必要不可欠であると考えられるため、科研費(奨励研究)の申請を支援するためのワークショップを開催したり、学内の競争的資金を使って申請を支援したり、モチベーションの向上を図る取組を行って、申請件数の向上を目的とする。

## 3. ワークショップについて

静岡大学技術部では、静岡キャンパス、浜松キャンパス、藤枝フィールド、天竜フィールドなどの拠点に分かれて活動をしているため、ワークショップの開催には、参加しやすいように移動を伴わないオンライン形式で行い、科研費(奨励研究)申請前の夏休み期間に行った。最初に主催の静岡大学技術部企

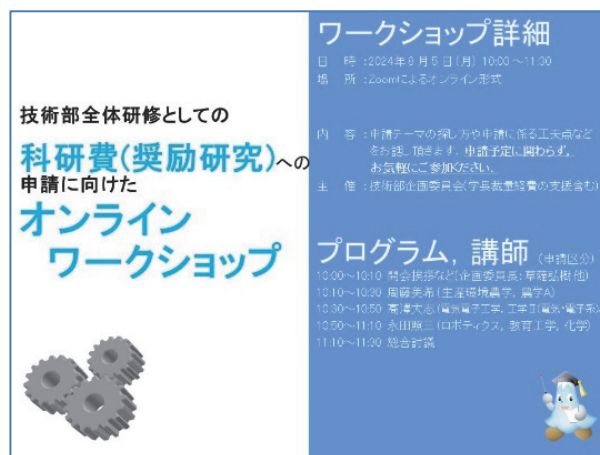


図 1 ワークショップの案内チラシ

画委員長の挨拶から始まり、科研費に関する説明や申請するメリットや申請に関する手順を説明した後、静岡大学技術部でのこれまでの科研費(奨励研究)の採択実績が多い人に申請に関する成功例や失敗例をもとに話をしてもらい、質疑応答を行う形式で実施した。図 1 にワークショップの案内チラシを示す。また、プログラム等を下記に示す。

日時：2024年8月5日(月) 10:00~11:30

形式：Zoom によるオンライン形式

参加者：技術部職員 35 名

内容：申請テーマの探し方や申請に係る工夫点など

主催：技術部企画委員会(学長裁量経費の支援含む)

プログラム、講師(申請区分)

- ① 開会挨拶など(企画委員長：草薨弘樹 他)
- ② 周藤美希(生産環境農学, 農学 A)
- ③ 高澤大志(電気電子工学, 工学 II(電気・電子系) A)
- ④ 永田照三(ロボティクス, 教育工学, 化学)
- ⑤ 総合討論

## 4. 結果および考察

### 4.1 ワークショップの実施について

参加者は、35名で全体の6割程度の職員の参加があった。案内期間が1ヶ月程度と短かった割には比較的参加者が集まった。これは静岡大学技術部の全体研修としての位置付けで静岡大学技術部企画委員会の主催として実施したことによるところが大きいと思われる。参加者のうち4名は、研究者情報が登録されている人なので、科研費(奨励研究)申請の対象者としては31名の参加となる。質疑応答では、申請項目にあるエフォートや研究経費や教育的・社会的意義などの申請時における資料作成等に関する質問が活発に行われ、少し予定時間を超過するほど熱心に行われた。そのオンラインワークショップの様子を図2に示す。



図2 オンラインワークショップの様子  
(上：説明の風景 下：質疑応答の風景)

### 4.2 アンケートについて

ワークショップを実施後には、アンケートを実施した。回答は、30名の方から集まったので、ワークショップ参加者の86%の回答率となった。また、今回のワークショップに参加しなかった人へもアンケートを実施して、13名の方から回答が集まったので、参加しなかった人の52%の回答率となった。

アンケート項目は、主に次のような項目とした。

- ① ワークショップは役に立ったか?
  - ② ワークショップの時間はどうだったか?
  - ③ 今までの科研費(奨励研究)申請回数について
  - ④ 今回の科研費(奨励研究)への申請について
- 以上の4項目を主に質問した。結果は、図3～図6に示すようなグラフの通りとなった。

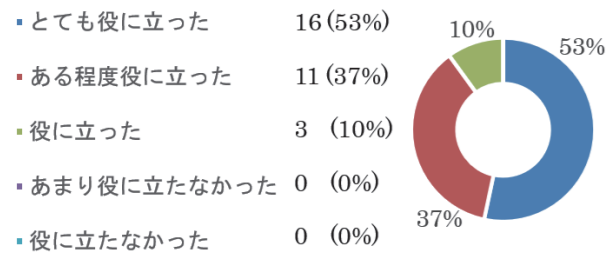


図3 アンケート結果①  
(ワークショップは役に立ったか?)

図3の結果から今回のワークショップについては、「とても役に立った」「ある程度役に立った」「役に立った」の三つを合わせると100%の回答になり、ネガティブな回答が0%だった事より、それなりに役に立って有効な手段だったと考えられる。特に半分以上の方から「とても役に立った」の回答があったので、この企画を実施して良かったと思われる。

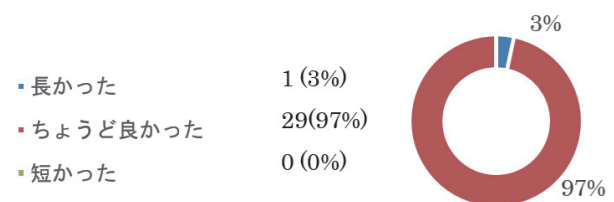


図4 アンケート結果②  
(ワークショップの時間はどうだったか?)

図4の結果からワークショップの開催時間については、「短かった」は0名で97%の人が「ちょうど良かった」と回答していることからある程度適切な長さだったと考えられる。1名が「長かった」と回答があったのは、予定時間を少し超過してしまったことが原因だと思われるので、次の開催時にはもう少し時間管理を徹底する必要がある。

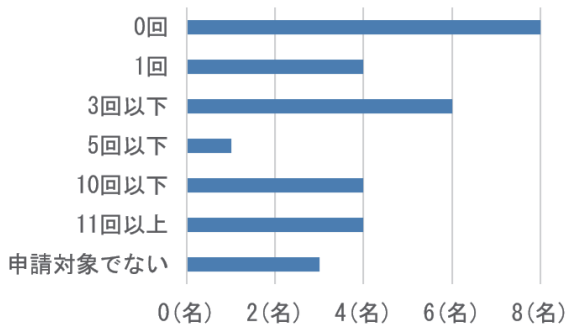


図5 アンケート結果③  
(今までの科研費(奨励研究)申請回数について)

図5の結果から科研費(奨励研究)への申請経験については、6割にあたる18名の方が3回(0回・1回を含む)以下の申請経験となっている。このことから今後の申請件数向上のための取組の余地が大いにあると考えられる。また、その後の追跡調査で、0回と1回と回答した人12名のうち3名は今回の科研費(奨励研究)に申請したので、ワークショップの取組の成果と思われる。

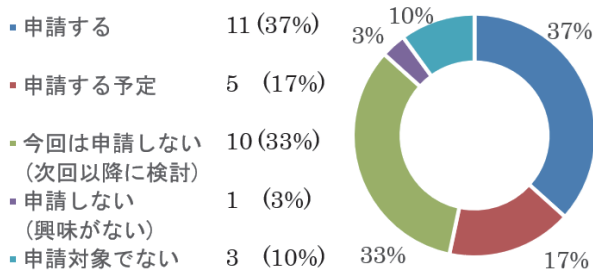


図6 アンケート結果④  
(今回の科研費(奨励研究)への申請について)

図6の結果から今回の科研費(奨励研究)への申請については、半分以上の16名の方が「申請する」「申請する予定」と回答があったので、取組の成果がある程度あったと考えられる。また、「今回は申請しない(次回以降に検討)」と回答した人が10名いたので、次回以降の申請件数の向上へ期待ができる結果となった。

また、今回ワークショップ(WS)に参加しなかった人へのアンケート項目は、上記の③と④の項目に加えて、主に次の項目とした。

⑤ ワークショップに参加しなかった理由

⑥ 次回ワークショップへの参加意欲

以上の4項目を主に質問した。結果は、図7～図9に示すようなグラフの通りとなった。

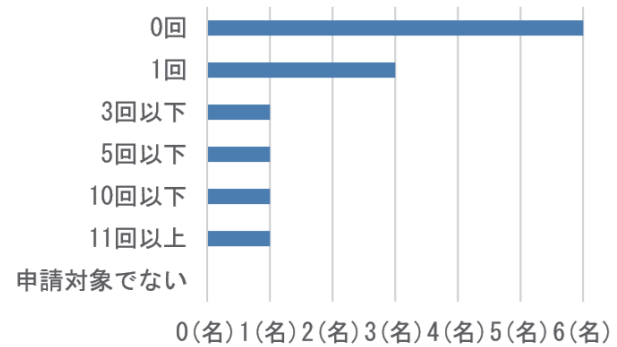


図7 WS参加しなかったアンケート結果③  
(今までの科研費(奨励研究)申請回数について)

図7の結果からワークショップ(WS)に参加しなかった人の科研費(奨励研究)への申請経験については、7割以上にあたる10名の方が3回(0回・1回を含む)以下の申請経験となっている。このことから今後の申請件数向上のための取組の余地が大いにあると考えられる。また、その後の追跡調査では、0回と1回と回答した人9名のうち1名が今回の科研費(奨励研究)に申請したという結果でした。

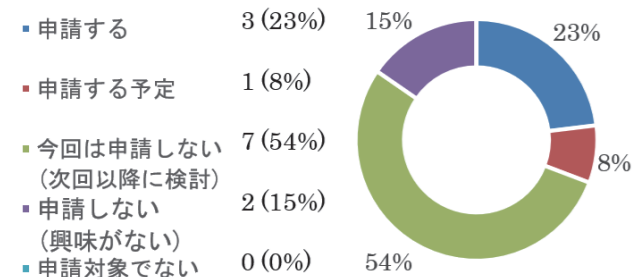


図8 WS参加しなかったアンケート結果④  
(今回の科研費(奨励研究)への申請について)

図8の結果からワークショップ(WS)に参加しなかった人の今回の科研費(奨励研究)への申請については、3割の4名の方が「申請する」「申請する予定」と回答があった。また、「今回は申請しない(次回以降に検討)」と回答した人が7名いたので、こちらの回答も次回以降へ期待ができる結果となった。

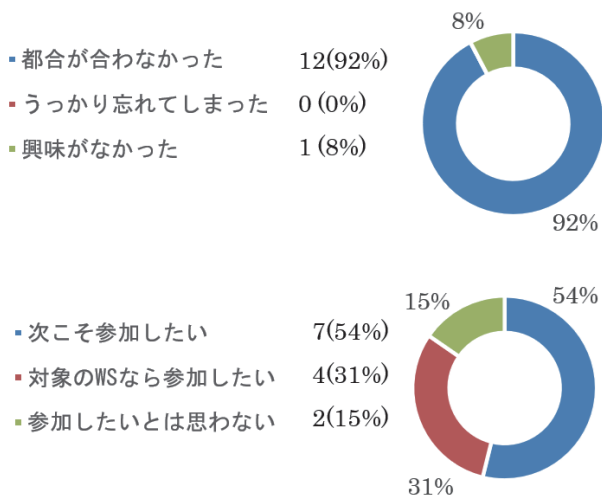


図9 WS参加しなかったアンケート結果⑤⑥

(上：⑤WSに参加しなかった理由について)

(下：⑥次回WSへの参加意欲について)

図9の結果からワークショップ(WS)に参加しなかった理由は、都合が合わなかったが大半なので、次回以降の日程調整や開催回数の課題としたい。次回への意欲についても、大半の人が参加したいとの事なので、今後の検討課題となる結果となった。

さらに、自由記述項目も設けたので、色々な意見も集めることができた。その一部を下記に抜粋する。

#### 【ワークショップ参加者の意見】

- これまで調書を作成する上での疑問点などが実際に採択された方からの回答で解消された。(類似の感想3件)
- 採択された研究内容だけでなく、不採択から採択まで変化の話を聞いて良かった。(類似の感想1件)
- 科研費(奨励研究)について全く知らない状態だったので、参考になった。(類似の感想1件)
- 申請の流れと具体的な実例を知ることが出来て良かった。(類似の感想1件)
- 皆さんの参考になるような発表ができたかは不安ですが、自分自身のこれまでの振り返りになり、今後について考えられるような良い経験になった。
- 申請書の背景を魅力的に書く点や、他の人に申請書を見てもらうことなど、採択者の工夫が聞けた。(類似の感想1件)
- 採択予算額についての情報が役に立った。

- 科研費申請時の書類の書き方講座等を行って欲しい。
- 申請書は、冒頭から読みやすく、同じ分野の人でなくても、最後まで読める構成がよい。(類似の感想1件)
- 通常の科研費の説明会はあるが奨励研究の説明会は無かったので、意義があると思うし、自分自身が奨励研究の申請対象者の時に、このような企画を行って欲しかった。
- 科研費の採択率を高める活動も行なって欲しい。
- 申請書等の相互閲覧(採択・不採択)を可能にする取組をして欲しい。(類似の感想2件)
- 技術部として組織的に科研費申請に取組む検討をして欲しい。(類似の感想1件)
- 科研費に1回のみ採択された人の話も少し違う視点があつたりしそうなので聞いてみたい。
- 今回のような企画を定期的に開催して欲しい。

#### 【ワークショップに参加できなかった人の意見】

- 次回も同じような内容で開催をお願いしたい。(申請方法、等)(類似の感想3件)
- 他大学の科研費(奨励研究)取得状況から今後の取得のヒントとなるような取組を行って欲しい。

以上のような意見等が自由記述項目に主に記載されていた。概ね好評な意見や感想が多く、実際の採択経験者からの工夫や不採択経験などが参考になったとの意見が多くあった。科研費(奨励研究)について全く知らない状態だったので、参考になったとの意見もあり、今回のワークショップが役に立ったと言える。また、今回のワークショップで経験談を話してくれた人からの意見では、自身の振り返りになって良かったとの感想もあったので、お互いにメリットがあり良い機会になったと思われる。その他の意見としても、研究者登録する前の奨励研究の申請対象者の時に、このような企画を行って欲しかったという意見があり、大変申し訳なく思う一方で、今回のワークショップがそう思わせるくらいの内容だったという事から一定程度の評価を頂いたと推察できる。

さらに、今後の提案などもいくつかあったので、今後の企画の際の参考意見として取り入れていけるように検討する。

### 4.3 学長裁量経費による支援について

ワークショップの取組とは別に本学内の競争的資金である「学長裁量経費」に科研費(奨励研究)の申請件数向上に向けた取組で応募したところ、申請額の半額措置ではあったが見事に採択されたため、希望者に対して申請の支援として、タブレット端末やノートパソコンなどを支給する取組を行い、モチベーションの向上を図った。その結果、16名の希望者に何らかの予算的な支援をすることができ、申請件数の向上の一助となった。

### 4.4 科研費(奨励研究)への申請件数について

上記のような取組の結果、今回(令和7年度)の科研費(奨励研究)への申請件数は20件となり、全体の3割ほどの申請率となった。一昨年の13件、昨年の14件に比べて、1割程度の申請率の向上があり、今回の取組の目的はある程度達成できたと思われる。さらに、申請者の8割にあたる16名が上記のワークショップに参加していたり、「学長裁量経費」の支援を受けたりしていることから、今回の取組が一定程度役に立っていると考えられる。

### 4.5 科研費(奨励研究)の採択結果について

今回(令和7年度)申請した科研費(奨励研究)の採択結果については、静岡大学技術部で5件の採択となった。このことも一昨年の1件、昨年の0件の採択件数を大きく上回り、申請件数の向上によるものやワークショップを行ったことによる様々な情報やノウハウの共有によって、より良い申請内容になったことが採択件数の向上につながったと考えられる。その事は、採択者5名全員がワークショップの参加者であったことから推察できる。また、採択件数5件のうち、2件は初めての採択となり、やはり今回のワークショップが少なからず良い影響をもたらしたと考えられる。

## 5. おわりに

今回は、近年低迷している静岡大学技術部内での科研費(奨励研究)への申請件数の向上を図るために、静岡大学技術部内での全体研修として企画したワークショップを開催して様々な情報やノウハウを共有したり、学内の競争的資金である「学長裁量経費」を用いて、申請を予算的に支援してモチベーションを向上させたりした取組の結果、申請件数を20件まで向上させることができた。さらに、採択件数は5件となり、採択率の向上も図ることができた。

## 6. 今後の課題

今後は、この取組を一過性のものにならないためにも何らかの形で継続させていくことが大切だと思われる。ワークショップに参加できなかった人のアンケート結果にもあるように実施の際の日程や複数回の実施の検討などで参加者を増やして、更なる申請件数の向上や採択件数アップを目指していくことが望まれる。また、申請内容のさらなる充実のためにもワークショップの内容の検討や今回惜しくも不採択だった人でも不採択順位がA(上位20%)の人などへの支援の拡充等で次回の採択につながる取組の検討を行う事により、申請件数と採択件数の両方のさらなる向上につながる可能性が高まる事を期待する。

### 謝辞

この取組を行う上でワークショップの主催を引き受けて下さり、全面的に協力して下さいました静岡大学技術部企画委員会に深く感謝申し上げます。特に、委員長の草薙弘樹 技術専門員や副委員長の戎俊男 技術専門員には、ワークショップの開催準備、案内、実施に際して、ご尽力を賜りましたので、深く感謝いたします。

また、そのワークショップにおいて講師を務めて頂いた静岡大学技術部機器分析部門 高澤大志 技術専門職員や静岡大学技術部フィールド部門 周藤美希 技術専門職員に深く感謝いたします。

最後に、この取組は、令和6年度静岡大学学長裁量経費の支援を受けて実施したものであるため、ここに謝意を表す。